

轍 わだち

2011, 4, 26 NO 13

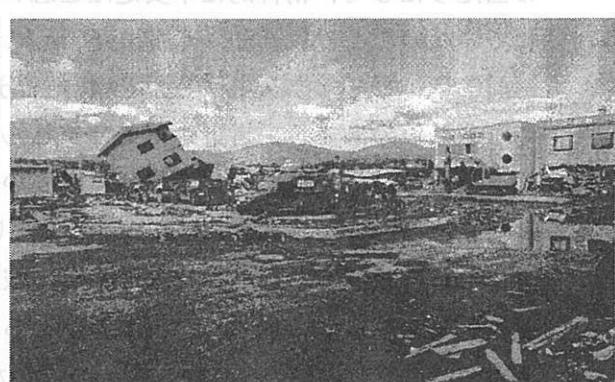
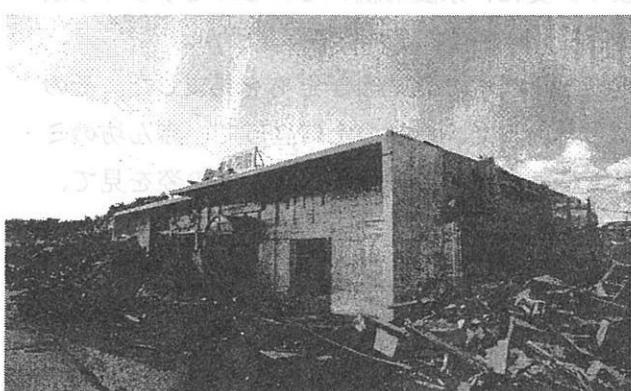
講演者を招いて福島原発事故についても学びました！

4、30日にお話しして下さる清水さんは、水難救助や山岳救助隊として14年の経験を持っておられます。講演に先立ち、実行委員会との打ち合わせを兼ねて、救助に行かれた福島原発の様子などについて映像を交えてお話しいただきました。「目に見えないものとの闘いが原発です」また、南相馬市の救助についてや、救助側の方がたの苦労や、被災地での救助期間中の食事についても教えていただきました。

私たちは、当日私たち中学生や高校生が聞きたいことをお伝えしました。見せていただいた映像はやはり、「轍 わだち」で知らされているような状態でしたが、ショックでした。当日は20分という短い時間内でのお話しなので映像はありません。

被災地訪問報告 その7

気仙沼市内を車で見て回ったときにとった写真です。右の写真は、大川という市内を流れ大きな川です。津波が来たときは、海から逆流してきたそうです。津波で川に車や家、がれきがたくさんしづんでいました。奥に見える住宅街は高台にあったため、津波の被害は避けられたようです。



上の2枚は南気仙沼駅と駅前の写真です。駅はコンクリートの壁と「南気仙沼駅」の曲がった看板しか残っていません。線路の上も駅の周りもがれきの山。浸水がひどく、がれきを撤去したところに砂利をしき、道が作られていました。右の写真は、駅前に来ていた大分からの自衛隊です。遺体捜索に来ているそうです。細長い棒を持ち、がれきの中を捜索していました。

H3-4 実行委員

「被災地のために高校生の私ができること」

「今勉強できることの幸せ。被災した方の分までがんばろう」

まず一番に思うことは、悲しんだり苦しんだり孤独になってしまった被災者の方々に少しでもその気持ちがやわらぐようなことができればいいのに、ということです。どうにかしてその悲しみをやわらげたいです。しかし、私達が被災した方々に言葉を送ろうとしても、うわべだけの言葉になってしまいます。つまり、本当にそういうことを経験した者同士でないと、その感情は分かち合えないということです。どれほどのことを考えていらっしゃるのかは遠く離れた私たちにはあまり分かりません。ニュースや新聞でやっていますが、被災者の事の気持ちなどはあいまいにしか伝わってこないです。

だから、私は間接的に被災者の方々を応援しています。まずは募金から始めました。ニュースで、募金で集まったお金が何百億もあるとやっていましたが、まだ全然足りていないので、その時初めて被害の大きさを実感しました。私はまだ高校生でバイトができないので、あまり募金できず悲しかったです。しかし、委員に入ることによって、自分の体や時間を使って被災した方々のために働けているので、委員に入って本当によかったと思っています。何かをしたいという気持ちを行動にうつすことはとても勇気がいるし決断もいる。けれどやってみないと始まらない。実行することの大切さも教えてもらいました。私の被災者の方々への応援は小さいけれど、少しでも30日のイベントで心が休まる瞬間を味わってもらえるのなら、笑顔を見せてもらえるのなら、しんどかった委員の仕事もむくわれるのだと思います。今の私では被災者の方々に何も声をかけられないけれど、いつか元の生活に戻れる日が来るよう願っています。

今回の震災で目の前で人が流されていく光景やがれきの下から続々と出てくる遺体を目の当たりにして、精神的に不安定だと思います。更に、余震も続いているのでゆっくり眠れていことでしょう。支援物資などはきちんと届いているでしょうか。

前にテレビで1つのおにぎりを4人で分けて食べているという子どもを見ました。その時は悲しみのあまり、言葉がでてきませんでした。また、屋根の上に登って、赤ん坊のミルクを下さいとダンボールに書いて呼びかけている母親の姿も見ました。その姿を見て、何もすることができない自分を情けなく思いました。

私たちは新学期を迎えたけれど、被災地の学校は避難所として使われていて、生徒の数も確認できない状況。被災地の子どもたちをかわいそうに思う気持ちとそんな中で新学期を迎えるもいいのだろうかという思いが交差し、とても申し訳なく思っていました。

学校に行って勉強できることを当たり前だと思っていたけど、こんな状況を知らされて、その考え方がありました。学校に行って勉強できることがこんなにも幸せなことなのだと。実行委員をやるからには被災地の子どもたちの分までがんばらなければいけないと改めて感じました。また、30日当日のイベントが少しでも被災地の方々への活力になったらいいなと思います。